つしかなかった。

南東の尾根を下ったあたりでは、バイドルマンともう一つ別の登山隊が暗闇のなかで立ち往生していた。「巨大な鉢から闇がこぼれ落ちるように」夜が訪れたと、シャーロット・フォックスは振り返る。一行がいた場所から第四キャンプまでは一〇〇㍍足らず。だがそこは、一歩足を滑らせれば谷底へ真っ逆さまの狭い尾根だ。

日付が変わった頃、嵐がいくらか収まった。すぐにバイドルマンは、余力のある者を連れて第四キャンプへ出発した。歩くだけの体力もない五人はその場に残された。

連絡を受けたキャンプからは、ロシア人のアナトリー・ブクレーエフが残された人々の救助に飛び出した。彼は、フォックス、ピットマン、ティム・マッドセンの三人をキャンプへ連れ帰った。

後に残ったのが、シーボーン・ベック・ウェザーズと難波康子の二人だ。未確認情報によると、第四キャンプからの救助隊は一〇日夜、意識を失った二人を発見している。だが、生存の見込みが薄いうえ、暗闇のなかで運ぶことは困難だと判断、救助を断念した。

この判断を批判するのは後知恵でしかないが、数時間後、ウェザーズは意識を取り戻した。「気がつくと氷の上で仰向けに寝ていた。想像を絶する寒さだった。右手は手袋がなくなり、手はプラスチックのように固くなっていた」と、ウェザーズは振り返る。

最後の力を振り絞って

きっと誰かが来て、この悪夢から救ってくれる——そう願いながらウェザーズは横たわっていたが、死が近づいていることを悟った。「妻と子供たちの顔が目の前に浮かんだ。あと三、四時間は生きられると感じたので、歩きはじめた」。すでに夜が明けて、一一日の朝になっていた。

歩き続けると、青い岩のようなものが見えた。「表面がなめらかでテントのようだった。そばまで行くと、誰かが出てきた。『もしこれが岩ならそんなことはありえない』って、自分に言い聞かせた」

ウェザーズはすぐにテント内に担ぎ込まれ、手当を受けた。服はカチカチに凍っており、切り取らなければならなかった。

その頃、下界では「ウェザーズ死亡」のニュースが駆け巡っていた。ベースキャンプからニュージーランドの旅行会社へ、さらに地球を半周して米テキサス州ダラスにいるウェザーズの妻のもとへ「死亡」の知らせが届いた。

彼女がこのニュースを知ったのは、ダラス時間の一一日朝。数時間後、ウェザーズが生きていたとの連絡が入ったが、その頃には友人や親戚が詰めかけていた。

だが、難波の家族には第二報は届かなかった。彼女が一一日夜に亡くなったという情報は、まちがいではなかった。

同じ頃、北壁ではインド・チベ

THOMAS L. KELLY—WOODFIN CAMP/PPS

ヘリによる救助で活躍したマダン操縦士

れていたウェザーズが第4キャンプに到着、翌日付き添われて下山

5月11日夜：第4キャンプに戻ったニュージーランド隊のアンディ・ハリスが消息を絶つ。現時点で生存は絶望視されている

5月13日：ウェザーズと高が標高約5800メートル地点で救出される

5月14日：暴風雪のなか死亡した8人のために、ベースキャンプで追悼式が執り行われた

ヌプツェ
7879メートル
シーボーン・ウェザーズと高銘和は、ネパール人のマダンの操縦するヘリコプターでカトマンズの病院へ運ばれた。ヘリコプターによる救助がこれほどの高地で行われたのは初めて
ャンプ 5822メートル

RESEARCH BY BRAD STONE AND ALDEN COHEN—NEWSWEEK

挑戦する者を待ち受ける危険

さまざまな危険が伴う高地登山には、念入りな準備が必要だ。人間の体に自然にそなわった機能も、大きな武器になる

極寒：低体温症（心臓の動きが鈍くなり、ときに死にいたる）を引き起こす

●断熱効果のある衣服が肌の露出を最小限に抑える。寒さで体が震えるのは、体温を上げようとする筋肉の働き

酸素不足：山頂では、酸素の量が海水面の約3分の1に減少する

●酸素ボンベは必需品だが、登山家の体も肺から余分な二酸化炭素を出し、体内の酸素量を増やそうとするため、呼吸の速さは地上にいるときの約4倍に

乾燥した空気：呼吸のたびに体の水分が失われるため、血液中の水分は50%から15%に減る。また高地では赤血球が増えて血液のスピードが鈍るため、凍傷にかかりやすくなる

●水分の補給は欠かせない。雪を溶かすためのコンロは必需品

判断力の低下：高地では脳の働きに影響が出て、判断ミスが増えたり自分を傷つけることさえある

●危機が生じた際に必要なのは登山隊のメンバー同士による連携プレー